

思い出すことども

村田 修 子

が、これだけはちょっと見ただけで何となく題名に心ひかれ先生の名前を知った。

其の後とびはねることに忙しく、本を手にもすることもなくまたたく間に年がすぎ、女高師の四年となり、途中から始まった戦争の進展に伴いそれに沿った日々を送っていた。そういう中でうれしかったのは、昔心に刻みつけておいた倉橋先生のお講義があることだった。

退屈な時間にはほかのこともしかねまじぎ生徒であったが、先生の時間だけは走って行って一番前の机のとりっこをした。

伺っていると何となく面白かった。「保育」ということの何であるかも知らなかったが何となくひきつけられた。その中で『まっ白いぬりたての壁がある。子どもがこれに向ったとき子どもは、壁が「やい、ここに何かかけるか、出来るならやってみよう」「なににお」というわけで落書をする……』これを面白く話された。これが今でも頭にのこっていて落書を見るとすぐに思い出す。

原理的なことから始まり、段々ほぐれて軽妙しゃだつな話の中にもひき入れられノートすることも忘れ、いきもちになつているときベルがなる。はっとして何かからこうなつてきたのかちょっとまごついているとき、その本筋にさつとかえしてくれるのは先生だった。

先生が女高師を退職なさってから、たびたびお目にかかる機会はなかったけれど、東京にいらっしゃる、今でも伺えばお目にかかれる」ということだけで私は心のよりどころを得ていた。何となく安定感があった。お年を召したことも、おみあしの不自由でいらっしゃることも知っていた。けれど先生と死、ということはなんだか考えられなかった。いつでもあのお口からひよいひよいとび出すウィットが感じさせる若々しさとそぐわないものだったから――

・懐かしいお講義

女学生時代図書館の新刊案内に「育ての心」倉橋惣三著と書いてあった。普段は注意しても見なかったところだった

• 先生になる入園試験

病氣、終戦が契機となり田舎の先生をやめ母校の体育の室ですごしていたとき「幼稚園に」ということになり、先生をおみかけするには珍らしい体育館の一室でお会いました。生徒のとき尊敬していた先生に一对一でお目にかかるということ胸がわくわくし顔が熱くなったのを昨日のこのように覚えてる。

眼鏡をかけた人は何となくこわい。その通り、にこやかな微笑の奥に心を見すかされるようなきらりとしたものを感じて、何ということなくひやりともした。こうして幼児の世界に入る為の入園試験がすんだ。

• やさしい先生

或るとき珍らしくMさんを御注意なさった。Mさんはしよげていた。夕方近くになって、先生は心配になったとみえて、私と一緒に帰るように仰言った。私は時がたつのをまって外がうすぐらくなつたころさそって帰った。驚いたことに次の日「昨日はありがとう。よかったよ、君が肩をだくようにして帰ってくれたから僕も安心して帰ったよ」と仰言った。誰一人居らず、先生も大分前にお出になったのだったのに、先生はどこかにいらっしやうって私どもが門を出るのをみていらっしやうたということが分つたとき、私は涙が出て仕方な

かった。

• よいおじいちゃま

二十四年八月、先生が待ち望んでいらつした男のお孫さん、和雄ちゃんとうちの明子が丁度同じ日に生れた。そういうよしみで時々顔合せに伺つた。生れたときは和雄ちゃんの方が大きく御満悦であった。余り抱かないで育てていらつしやるのが先生は大変御自慢で、感心させられて退出したものだつた。

満一才のお誕生日、一週間前より歩くようになった明子をつれて伺うと、和雄ちゃんは一人で立っでもうすぐ足が前に出るといふ状態であつた。「早いね、うちのもうすぐなんだが……」と仰言つた。

次の年子ども達も大変色々なことが出来るようになった。ホームグラウンドの有利さもあって和雄ちゃんは大活躍であつた。明子は何をして下さつても泣き声ばかり立てた。

そのとき、NHKより放送なさつた「茶の間のひととき」といふ放送の話題に出てきたお孫さん専用の小黒板を持ってきて下さつて、「何かかいて遊びなさい」といって下さつた。「和雄かいてごらん」と先生が仰言ると目、鼻、口、手のある人をかかれた。明子は仲々手もふれずやつとまるだけかいた。私が「早いですね」とほめると先生は、今でも思い出すとほほえましくなるような笑を顔いっぱい浮べられて

「去年は明子ちゃんが先に歩いてしまったから、しまったと思つたよ」と本当にうれしくてたまらないという顔をなさつた。それでも「明ちゃんはよそにきているんだからね」と私をなぐさめて下さるおつもりのような言葉を仰言つた。帰途そのことを考へては思はずひとり笑いが浮んできて仕方がなかつた。「先生のからをぬいだよ、おじいちゃま」と。

(お茶の水女子大附属幼稚園教諭)

倉橋先生を偲びて

山口 菊代

環境が商店街に近い為早朝からのラジオはとかく遠慮勝になるのに四月二十一日は午前六時心にもなくスイッチを入れた瞬間、倉橋先生の御逝去が報ぜられました。虫の報らせとさういふのでしょいか先生の御霊が西の端の長崎まで飛んでこられたような気持ちに打たれ幾度か倉橋先生倉橋先生とお呼び致しました。フレーベル先生の亡くなられた四月二十一日、年

こそ異え四月二十一日、倉橋先生はやっぱり日本のフレーベル先生でした。

女子師範卒業の小学校教育を見つめただけの然かも二学期間の経験で幼稚園に飛びこんだ私は、自分の貧しさの為幼稚園教育のよさを味わえなくて五年間苦しみに苦しみました。先輩の先生が一度東京に出て「倉橋先生のお話をきいてごらん」とのおすすめに不精不精上京致しました。昭和三年の夏の講習。今だに忘れられない「積極的保育作用」と題したお講義、私は穴があつたら入りたい思いでこれを伺いました。あの小さいと思われる一事一事が保育上それ程に重大であつたか、子どもを見直し、幼稚園を見直し、自分を見直し、実に自分の行くべき道に明るさと力強さをおみやげにして帰国致しました。そして私は一年交互に上京して、先生のお声にふれることを楽しみとしました。先生のすばらしい教育観に導かれて私の幼稚園への道は開かれました。今私はペンを走らせてあの当時の具体例を思い浮かべつつ感謝の涙に浸っております。

昭和六年一月から幼児の教育の巻頭辞が先生によって書かれました。保育の真心がさわやかな文筆で示されました。又しても私は心ひかれそれを写し始めたのです。幼稚園生活が楽しければそれを目読し苦しければ音読し一カ月に一度はくり返しくり返しくり読みふけりました。